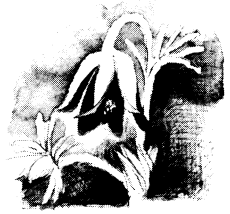


広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	鏡の間
Auther(s)	宮市, 千春
Citation	児童の言語生態研究 , 14 : 106 - 107
Issue Date	1990-11-25
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045168
Right	
Relation	





鏡の間

報告 相模女子大学小学部教諭

宮市千春

三題話……

「たましい」「へび」「マーク、しるし」「沼」「毛」この五つから三つ選んだ言葉を使ってお話を書いてみよう。こうして子ども達に自由に書かせる。すると、言葉の使い方にパターンが見られた。

「たましい」●必ず出はいるする、動く。

●たましいを食べる、またはたましいに食べられる。

「へび」●化け物として登場する。

●恩返しをする、たたりがある。

●どこから流れてくる。

「マーク、しるし」●しるしをもった者は不思議な運命をたどる。

●マークが弱点である。

●変身するきっかけになっている。

「沼」●正体のわからないものが潜んでいる。

「毛」●石から毛が生える。

たましい

むかしのこと、夜おばあさんが、おはかにたましいをとりに行きました。

おはかには、○○家のはかとかいていて、そのしたにその家のかもんがかいてありました。おばあさんが、いつもとりにきているので、なにもたましいは、ありませんでした。少したつて、おばあさんは、泣きながら、

「おう、このはかはもうたましいがないのか。くやしーナー。」

と言いながら、帰りました。家にもどつて、おじいさんが言いました。

「もう、たましいがないのか。おーもうおしまいだー エーンエーン」

と言いました。おじいさんもやっぱり泣いてしまいました。その夜は、二人とも泣きながらねました。たましいを、どうするかというと、食べていたので、その食べものがなくなつたので、二人は泣きました。その後、二人は、たびに出て、たましいをさがしました。でも、なかなかみつからなく二人で神様に、

「どうかたましいをください。」

とたのみました。でもなにもこなくとうとう二人でぬまにおっこち、じさつをして死にましたが、たましいを、食べていたので、またいきかえつてしまった。それからは、もうたましいを食べず、へびをたべてくらしています。

おしまい

くま

ある日、よすけという男がとなり町からくまをこらしにきた。村の人はこんなことをいう。「くまはこわくて力もちだべや。やめろ」でもよすけという人はいうこともきかず山へいってしまつた。よすけがあるいているうちに、もうまつくらの夜になつていた。よすけはしょうがなくねてみると、くびがぬるぬるするからみてもとへびが10びきもいる。「ギャ——」といつてにげたらそこにはくまがねていて、くまをそのばでこらししてしまつた。よすけはほつとしてくまのまえでねてみるとくまのたましいがこつちをにらんでいます。よすけはあおじろいかおをしています。うごこうとしてもうごけません。くまのたましいはよすけをたべてしまつたと。

おかしな話し

グリーンランドの中にスチューデントというおかしな町があつた。その町に女の子のあかちゃんがありました。そのこのおでこには竹というしるしがかかれていた。いくら消しゴムでけし

てもきえないので茶いろのきれいなかみの毛をのばしてかくしていました。そうしてなん日かすぎた夜のこと、たましいのマークがついたすてきな王子様が「そのうつくしいひめをどうぞわたしにください。」「ええいいですよ。でも一つだけやくそくをまもってください。夜わたしのへやをのぞかないでください。」とひめがいった。そして王子はひめにきいた。「どうして？」それは「こうこうこういうわけで人に見られたくないのです。」

ひめはまたいつものうっかりびょうがでてしまつたのです。「あ、いつてしまつた。ひみつをいつてしまつた。」しかたがない。あなたとはもうけつこんしちやう。」「ハッピー。」めでたしめでたし。

シュウマイ王子と 毛が長いゆうれい

むかしむかし、りっぱなしろがありました。そのおしろは太陽があたつてゐる野原につつまれた、人どろりがよいおしろでした。だけど何年かすぎて、ふしぎな話がうわさでながれてきました。それはそのおしろに夜になると毛がながいゆうれいがでるといふことです。「これはたいへんだ」

おしろにいるシュウマイ王子はなんとかたいじをしようと②というしるしのかいてある洋服をきて、その毛が長いゆうれいをたいじしました。そうしたらゆうれいは、ぬまの方へ行つてかおをぬまにつけて、そしてそのゆうれいのたましいがそらへまいあがつてきました。

三題話

むかしむかし、ある所に、ぶんめいのほつたつした大国がありました。大国の名前は、「グリーンマメ大国。」という名前です。その大国には、ふしぎな人がいました。その人の名前は、「ピーマンキュウリ」さんでした。その人は、ふしぎと言つても、めずらしい物を持つていました。そのめずらしい物とは、「ギューザ大国」の「ニクマン王子」のたましいです。水しよう玉のように、うつくしいまいる玉です。ある日ピーマンキュウリさんは、グリーンマメ大国の王様によばれました。ふしぎに宮殿に行くと、王様がいきなり「おまえ、かたをみせてみる!!」と言うのです。びっくりして「はい!!」

と言つて、見せたら、かたにはあく

まのようなマークがついているのです。自分でしらなかつたのに、王様がしつているので、びっくりしてどうしてしつていのか聞いたたら、

「おまえをしらべていた男が見つけたのだ。」

と言いました。しらべていた、男はまじゆつしであつた。そうしたら男に、

「あなたは一〇〇〇年に一ど産まれるかただ!!」

と言われてピーマンキュウリはびっくりしました。その日はへんなかんじでピーマンキュウリさんは帰りました。その日の夜から、へんなことがおきるのです。ねてみると、一階のへやから、へんなおとが聞こえるのです。そのおとをしんげんに聞いていると、

「とぼけた顔してババンバン。」

とか

「あへんなおじさん。」

とか言つていゝのです。そして五日後ピーマンキュウリさんはおもいきつておりてそのへやに行くともう一人の自分がついて、おいでおいでをしているのです。そしてひっぱられるように行つたら、食べ物がたくさんあつて、食べまくつていたら、食べすぎて、その日一日ねこんでいましたとき。